

2015年度
小論文B
(問題)

<H27099281>

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～3ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左記記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。なお、解答用紙が複数枚ある場合には、それぞれの所定欄に記入すること。
5. 受験番号の記入にあたっては、左記（数字見本）にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)
58001



万	千	百	十	一
5	8	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4
5	6	7	8	9

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

小論文作成上の注意

1. 句読点、記号等、および改行のために生じる余白もすべて字数に含む。また、解答用紙の字数を超えて解答してはいけない。（句読点、記号等は、必ず独立した二マスを使用する。）
2. 本文中に自分の氏名を書かないこと。
3. 下書きは、別に配付の下書き用紙を使用すること。試験終了後、下書き用紙は持ち帰ること。

左の文章を読んで、二つの設問に答えなさい。

近代をどこからと見るかは諸説ありますし、日本について言うなら明治維新以後の西欧文明の移入以降を扱わなければならないのでしようが、ここで考えたいことは生命・人間・自然・科学・科学技術であり、しかも私のかなり個人的な見方を語ることにしますので、戦後、とくに二〇世紀後半の、分子生物学と呼ばれる新しい生物学が誕生して以降の時代を見ていくことにします。

この時代、私たちが求めてきたものは何よりも、「便利さ」と「豊かさ」だったと言ってよいでしょう。まず、家庭の中に入ってきたのが洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ（モノクロ）で、三種の神器と言われました。タライを使って子どもたちが汚してきたシャツからシャツまで手洗いしていた女性にとって、スイッチ一つで汚れを落としてくれる洗濯機は夢の道具でした。便利さの象徴です。冷蔵庫も然りです。その後三種の神器は三〇と呼ばれるカラーテレビ、自動車、空調機になりました。便利さは、ぜいたくな気分へと移行したのです。

ここで言う「便利さ」「豊かさ」は物が支えてくれるものであり、物を手に入れるためのお金が豊かさの象徴となりました。便利さとは速くできること、手が抜けること、思い通りになることであり、さまざまな電化製品、自動車や新幹線などの交通手段、携帯電話、その他諸々、次々と開発された機器はさらなる便利さをもたらし、それらの製品を生産する産業が活発化することで経済成長、つまりお金の豊かさが手に入りました。私たちはこのような変化を進歩と呼び、そのような社会を近代化した文明社会、つまり先進国の象徴として評価し、この方向での拡大を求めたのです。

しかし、「人間は生きものであり、自然の中にある」という切り口で見た時、この方向には大きな問題があり、見直さなければなりません。なぜなら、それが生きものとしての特徴と合わないところが多いからです。

速くできる、手が抜ける、思い通りにできる。日常生活の中ではとてもありがたいことです。困ったことに、これはいずれも生きものには合いません。生きるということは時間を紡ぐことであり、時間を飛ばすことはまったく無意味、むしろ生きることの否定になるからです。

同じように、「手が抜ける」も気になります。手塩にかけるといふ言葉があるように、生きものに向き合う時は、それをよく見詰め相手の思いを汲みとり、求めていると思うことをやってあげられる時にこそ喜びを感じます。野菜づくりを趣味にしている、ある会社の社長さんが、「肥料や水じゃないんだよ。毎朝この機嫌はどうかと声をかけてやればおいしいトマトができるんだ」と話す時の顔は、経営について語る時のそれとは違い、なんとも柔和です。日常は厳しいけれど、その底にはこのような生きものへの眼があるのだと思うと安心します。

しかし戦後の日本社会は、そうした生きものへのまなざしをむしろ切り捨て、圧倒的に、

便利さ、効率、自然離れした人工環境をよしとする価値観のもとに「進歩」してきました。そうした価値観のもたらした最たるものの一つが、「東京圏への一極集中」だと思います。この異常とも言える一極集中社会は、生物が生きる場としては、大きな問題を抱えています。生物とは本来「多様」なものであるのに、この社会は均一性を求めるからです。

生物多様性という言葉は環境問題との関連で語られることが多く、人間が環境を「保護する」ために守らなければならないこと、というニュアンスで受けとめられていますが、生物は本質的に多様であり、人間もその中の一つだということはこれまでに何度も指摘してきました。生きものの多様性は、それが暮らす場所との関わりで生まれているわけで、あるところ集中して暮らしたら一様になるのは当然です。東京への一極集中は、生きものとして生きるという生き方を許しません。しかも、多くの発信が東京からなので、社会としての価値観や生き方の選択が東京で決められてしまうことになります。北海道から沖縄までさまざまな自然の中でそれを生かした暮らしを作っていくことが、「ヒト」としての豊かな暮らしにつながるのに、です。

(中村桂子『科学者が人間であること』岩波書店)

【設問】

(一) 本文に示されている「近代化した文明社会」と「人間」の関係を、二百字以上三百字以内で要約しなさい。

(二) 速くできる、手が抜ける、思い通りにできるといえることが生きものには合わない、という筆者の考えをあなたはどのよう理解するか。自分の体験に即して、三百字以上四百字以内で具体的に述べなさい。

〔以下余白〕

受驗 番号	万	千	百	十	一
於氏名					
氏名					

(二) 小論文解答用紙は汚したり、折りまげたり、破ったりしないこと。

(三) 字数を厳守すること。

200